

フェミックス・新刊のご案内

障害児もいるよ ひげのおばさん 子育て日記

中畝常雄・中畝治子著

2008年11月11日発行

A5判並製・カバー装・160ページ

ISBN978-4-903579-19-1

本体1,600円＋税 発行：フェミックス

おもしろい本です。
笑えて泣けて、
いつの間にか元気になります。

この本は、重度の障害児の長男・祥太くんと二人のきょうだいを、
日本画家の仕事と家事・育児を妻と交替しあい、周りの手助けも引き込んで
育てた「ひげのおばさん」こと、中畝常雄さんの子育て奮闘記です。
おじさんとおばさんを行きつ戻りつするうちに、
男の棒を抜け出して帰る場所がなくなったことを開き直って楽しむ常雄さんと、
同じ日本画家の妻・治子さんの辛口コメントとの絶妙のかけあいは、
泣けて笑えて、いつの間にか元気になれること請け合い。
いまどきのワークライフバランスの究極モデル、
子育てに悩む若い世代へのくがんばらなくていいよ」というエールです。



(文中イラスト 中畝治子)

【プロフィール】 中畝常雄(なかうね・つねお)/中畝治子(なかうね・はるこ)

横浜市在住。東京藝術大学日本画科で同級生となり大学院で学生結婚。模写や修理の仕事しながら、それぞれの作品を発表。共に参加した松島瑞巖寺禪障壁画復元模写事業は10年以上に及ぶ。完成後の1999年からは東京・横浜などで「二人展」として作品を発表。1984年に長男・祥太が生まれる。重症心身障害のある祥太の介助と仕事を、二人で交替で続ける。祥太、友雄、干明の三人の子育てと仕事に追われる日々の雑感を「ひげのおばさん子育て日記」(2000年～03年)、「続・ひげのおばさん子育て日記」(05年)として『くらしと教育をつなぐWe』(フェミックス)に連載。祥太は2002年4月に17歳で亡くなる。治子は現在、週2日の図工の先生、講演活動等も行う。ジャンパタイムズの連載をまとめた、はせみつこさんとの共著『ひらひらきらり』(富山房インターナショナル)がある。

◆ 好評発売中！お問合せ・ご注文はフェミックスまで

ただ今、「中畝本を売る勝手に応援隊」募集中！ 10冊以上1割引になります。

電話 03-3511-0028 fax 03-3511-0029 メール info@femix.co.jp

-----『障害児もいるよ ひげのおばさん子育て日記』購読申込書-----

お名前	お申込数
	冊数
ご住所(〒)	書店名
TEL	FAX
E-mail	

本の紹介

障害児もいるよ
ひげのおばさん
子育て日記
中畝常雄・中畝治子著

冠野 文

「ひげのおばさん子育て日記」はWeが二キの表紙になる前に連載されていた。字が多いWeの誌面のなかで、治子さんのイラストは目をひき、もちろん常雄さんの文章と治子さんのコメントも愛して、私は毎回愛読していた。

治子さんと常雄さんのところに初めて生まれてきた祥太には障害があった。母親の自分がかんばらなくてはと思ひ込んで、お先まつ暗な気持ちで右往左往し、祥太の存在をなかなか受け入れられなかったと治子さんは書いている。

る親は99%が母親だ。たまの行事や、送迎の運転手役として父親を見かけても、子どものことは妻に任せますという感じで、どう関わればいいのか、何を注意したらよいかを尋ねようとしても、お母さんを探してバトンタッチされてしまう。

サラリーマンのお父さんは障害をもつ子の可愛さをわかつてるかな、かわいそうとばかり思ってるんじゃないかな、祥太のような重度の子は反応が少ないから、抱いていないと可愛さがわからないよと治子さんは語っている。

常雄さんは、周りがお母さんばかりの中で、通院や通園に付き添い、ご飯の支度をし、祥太を抱っこして育ててきた。初めのうちはどこでも「お父さんはいいですよ」と遠慮されていたそうだが、なんでも一緒にやってみようか対等につきあってもらえるようになり、弁当のおかずを分けてもらえるようになり、お母さん達がわいわいと

障害は不幸をもたらすもの、自分の自由や人との関係をうばい、苦勞と貧乏をもたらすものだと思ってしまうのだと常雄さんも書く。

一人がそう思ったのも無理はない。障害児キョーカイでは、親がすべてを犠牲にするのはアタリマエで、めぞそうとするのは健全児のようになることで、家でもこの訓練をやりなさい、遅れを取り戻せるかもしれないからがんばりなさいと迫られるのが常だった(今もそういう傾向がなくなったとは言えない)。

だが、もしかしたら治るかもしれない、もしかしたらフツーになれるかもしれないと思う生活は、結局いまの状態を否定することになる。訓練のただけに生きるような生活を自分たちは本当にしたいのか? 祥太は望んでいるだろうか? と考えたときに、大きな疑問がうまれた。親がかんばれば子どもは障害がよくなる、と思ひ込まれそ

うになった嫌な思い出だと常雄さんは書く。

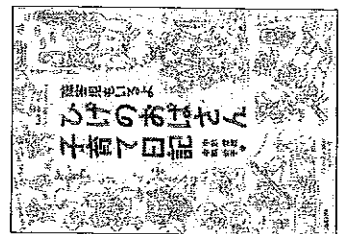
うになった嫌な思い出だと常雄さんは書く。

加えて、子どもが生まれてくると、母には子どもの世話をがんばれというプレッシャーが、父にはオカネを稼いで家族を支えるのが男だというプレッシャーがかりがちだ。それが励みになるという人もあるだろうが、中畝さんたちはこりや無理だと早々にギブアップした。立派な母になることから、稼ぎのよい父になることから、降りた。それからは交替で子どもの世話と家事をやり、交替で仕事に行くことにした。足りないところは周りの人たちのたくさんの助けを借りた。助けあって、助けてもらって、体験を共有していくことで、安心して育てていける関係をつくってきたのである。

そんな風によつていくのは、とりわけ障害児をもつ家庭では珍しい。私もこれまでいくつかの作業所や施設に入り込んだことがあるが、そこで見かけ

をつよめ、人と人とのつながりを広げていく存在だということに気づく日々だった。

こうあるべきという枠づけから抜けだした喜びと誇り、迷い悩みながらも子どもを育てることの楽しさ、障害のある子とない子を育てて見えてきたことのあれこれは、読んでいて本当におもしろく、時にほろりと涙がこぼれそうになる。手元において、くりかえし読みたくなる本です。



A5判並製カバー装・160頁
定価一六八〇円、フェミックス

★ご注文はフェミックスまで

電話 03-3511-0028 fax 03-3511-0029

メール info@femix.co.jp

http://www.femix.co.jp/bookorder/

ブラジヤーの話で盛り上がりつつある保護者控室ですつかりなじむほどに常雄さんは「おばさん」化した。「ひげのおばさん」の由来である。

以来、親の会や学校のPTAなどで常雄さんは「ひげ効果」を発揮しつつ、世の中はおばさん(母親)とおじさん(父親)を別々に扱うことになっているのを発見していく。ワークライフバランスだの男女共同参画だのというけれど、今でもだいたいのところはワークだけ人間とライフだけ人間による男女「分担」参画なのである。お役所が出しているパンフレットやキャッチフレーズはものすごく嘘くさいが、本当は中畝さんみたいなのがワークライフバランスで男女共同参画というのだろう。

祥太、友雄、千明の三人を、中畝さんは一人+αで育て、暮らしてきた。それは「何もできない」とマイナスの眼で見えていた祥太が、一緒に生きる絆